

能楽師のつぶやき

飯富, 章宏

能楽師 | 重要無形文化財総合指定・大倉流小鼓方 | 福岡市能楽協議会 : 会長

<https://doi.org/10.15017/26573>

出版情報 : 和の文化. 1, pp.23-26, 2012-03-31. NP0法人和の文化研究会
バージョン :
権利関係 :



研究ノート

能楽師のつぶやき

飯富 章宏

私の生業は能楽であるので、このことについて、日頃気になっていることを、分析考察して、諸氏のご指導を仰ごうと思い、この研究ノートとする。いくつかの論点があるが、ここではそれを羅列するにとどめる。各々の論点については、号を重ねて考察を深めることとしたい。能楽という用語は明治期に「能楽社」が創設された以降の名称である。それ以前は、猿楽もしくは単に「能」などと表記されてきた。世阿弥など芸能従事者は「申楽」を使っていた。そこで、この芸能自体を呼ぶのに江戸時代までは「猿楽」、明治以降現代は「能楽」と表記する。世阿弥などの文献からの引用はその表記に準ずる。

1. 能楽の歴史的考察

【黎明期の猿楽】

日本の演劇史を考えるにどのあたりから考察するかは重要な課題であるが、能楽を音楽劇ととらえる立場から、古代の終わりごろから中世にかけてととらえる。その理由の一つは、古文獻が乏しいこと、記紀などに記述されている古代の芸能の研究がそう進んでいないことによる。私の不明が一因であるので、調査研究を進めるうちに今後取り扱ってみたい。

能楽は、概ね能と狂言とに分類されるが、原初は区別されていなかった。有名な藤原明衡が著した「新猿楽記」の成立は平安時代末期、ちょうど宇治の平等院鳳凰堂が寺院となった頃である。その後、白河院、鳥羽院、平忠盛・清盛の頃に「猿楽」の記述がされるのである。このころの猿楽は音楽を伴奏とするものまね芸として、滑稽なしぐさを演じていた。時に卑猥な表現や残酷な描写も交えていたであろう。異国情緒豊かな大陸からの文化に日本の庶民が触れたと考えられる。

それまでにも、記紀万葉の時代から日本民族固有の芸能はあったが、音楽劇としては確立していなかった。また、先行の大陸系芸能＝伎楽、散楽などは、宮中や仏閣で催されていて、大衆には遠い存在だったと思われる。平安時代、鎌倉時代と日本が大きく育っていく過程で、農村や都市を中心に、大衆文化として発展してきた。源平の争乱、元寇、南北朝の動乱を経て、庶民が新しい芸能を求めていたのであろう。そこに観阿弥という天才が現れ、工夫に工夫を重ね、申楽(猿楽)を確立したと考える。

【観阿弥・世阿弥・元雅】

この越智観世三代は別稿で深く考察したい。ここには、私の考えの骨子のみを上げる。

観阿弥→世阿弥→元雅という能楽成立の流れには疑問がある。どちらかと云うと世阿弥は異質である。大衆から隔絶していると感じる。世阿弥は申楽を時の一級品の文化とした

かったのであろう。世阿弥の曲は、よく貴族趣味と言われるが、それは必然のことで、世阿弥にとって見所（観客もしくは批評家）とは、足利義満や二条良基などの上級武士や公家だ。この人たちに認められなければ、意味がないと考えたのであろう。

私は個人的に元雅の作品が好きである。庶民の好みとする『子探し』や、『物狂い』、『仏の救い』などを題材とし、世阿弥が確立した文学性や優雅さ、また幽玄美などの要素を付け加えている。

元雅の作品については、祖父観阿弥への回帰ととらえていい。世阿弥が模索した複式夢幻能の形式よりは、むしろ観阿弥の一場現在物を好んだ。複式夢幻能は長い話を短くするのに有効だった。世阿弥以前の猿楽は、だらだらと話が続いていたのを、前場と後場にばっさり分けることで、短くできた。元雅はこの手法を発展させ、場面転換を工夫することで、切りつめていったのでは、と思える。

【禅竹・小次郎など】

この演能時間短縮の過程で抽象化や定型化を、副産物として手に入れたのであろう。その後の観世小次郎の「船弁慶」、「紅葉狩」や「安宅(作者不詳：小次郎説も)」などは、物語を観客に理解させるため、演能時間が長い傾向がある。好きな曲であるが「遊行柳」も長いと感じる。

禅竹の作品は世阿弥を意識している傾向が強い。「芭蕉」や「定家」、「楊貴妃」などが当時の大衆に理解できたかは疑問である。文化が地方に伝播し、京都文化を模倣する守護大名などをパトロンとして、その好みに合わせていったのが原因ではないか。禅竹は、仏教界や他の文化人との交流も知られている。能楽を新たなステージへと変えていった功労者といえるのではないか。

大衆演劇として能を見ると、歌舞伎へと変化していくのは必然であろう。こちらの流れが本筋と思える。逆に世阿弥は早すぎた。現代演劇の世界としても、革新的と評価されている。小次郎の作品は能に不慣れな観客でも楽しめ、飽きさせない面白さがある。

以下の項目も今後考察していきたい。

【戦国・織豊時代の能】【他の芸能への影響】【幕藩体制下の能楽】【近代での能楽】

2. 現代の能楽の課題

【音曲あつての文学】

小鼓の稽古をするときにお話しするのだが、「カラオケ」というシステムは、まず伴奏がある。画面に詞章がでる。歌い出すタイミングが表示される。スピーカーや密室といった音響についての補助手段が提供される。そこで上手に歌えるように感じ、ますます気持ちよく歌える。

能の演奏を考えたときでも、まず楽曲がある。その楽曲の上に詞章がのっている。舞が入る。ストーリーを構成し、芝居仕立てになる。つまり、もともと音楽劇なのだ。四拍子（笛・小鼓・大鼓・太鼓）を無くしては能とはならない。昔は素謡(謡曲の歌曲部分)の稽古にも、拍子盤(囃子事を指導する時の一種の打楽器)を使用していたそうだ。

謡を稽古されている皆さんも「大ノリ」とかには、戸惑ったのではないだろうか。原初

の申楽は、この「大ノリ」や狂言などで使われる「小謡節」が基本形式といわれている。まずこの拍子を習得するのが、大事だった。

私事で恐れ入るが、飯富家は熊本でワキ方をしていた。私も三歳くらいから稽古をし、小学四年生のとき「猩々」で初ワキを勤めた。その時の祖父の稽古の大半は、囃子謡(楽器の伴奏を前提の歌曲)の特訓であった。子どもながらに、こんな難しいことは無理と悩んだ思い出がある。

シテ方の子は、仕舞の稽古を積むにつれて、自然とこの囃子謡の拍子が身についてくる。プロの稽古は、舞に主眼が置かれるのも、その辺りが理由かもしれない。基本のリズムが出来れば、謡い本を読み、先輩たちと一緒に地謡の前列で謡っていけば、謡は自然と上達できるはずだと。

「ウタウ」という和語の語源に「ウッタウ」や「ウチアウ」とあると聞く。前者はまさに神仏や上級者に訴える。後者は身体や音体を使用して、拍子を取り、歌う。日本文化の根源にこういう事があると思う。貴族階級のみならず庶民もこのように楽しんでいたのであろう。宴会でも飲めや歌えとなるのは、老若男女問わずにこの国のスタイルである。

【幼児教育と古典芸能】

稽古事は六才の六月六日に始めると昔から言われる。この頃には、自我が生まれ、物事の成り立ちをある程度理解できるようになる。世阿弥の年来稽古条々にも「七才をもて初めとす」とある。

また年長になると、恥ずかしさが先に出て、習いごとがうまくいかない傾向にある。これは教育心理学や青年心理学でも定説であろう。まさに小中学生のころ、日本の伝統芸能に親しんでもらいたい。お稽古に来られている若いお母さんの話だが、時々連れて来られている幼稚園児のお子様が「ママ、ヨ・チ・ホ・ボでしょ」と小鼓の稽古のことを話すそう。この頃が一番吸収しやすいのであろう。

先日デンマーク公演に行ってきた。コペンハーゲンの外国人学校でピアノの指導をしている日本人の方が、校長先生に依頼されて日本文化の講義をすることになったそう。日本の音楽を扱おうと思っても、指導が出来ず、尺八の演奏家(日本人ではない)に依頼して、体験授業をしてもらったと話されていた。

【能を鑑賞する心得】

能楽鑑賞の難しさの一つは、扱っているエピソードが現代人に馴染みがないことであろう。小中学校で「船弁慶」や「橋弁慶」を扱う時も、義経、牛若丸、弁慶から説明しなければならぬ。私は一頃ドラえもんの静ちゃんの家の表札が「源」だということから、引っ張ってきた。近頃はこれも古くなり、使えなくなった。

能の起源を考えると、詞章に重要性はなかったと思える。それより、リズムカルな音楽、音響、俗世ではみられないような上級貴族の衣装、超自然の生物や霊態、神や仏の姿などを観客に見せ、それらしく真似てみせる。その中に、仏教的な教えを感じさせれば、目的を達したのではないか。観阿弥、世阿弥、元雅の時代も大衆の観客にとっての興味はそのあたりであろう。

広島県福山市の沼名前(ぬなくま)神社に豊臣秀吉遺愛の能舞台がある。客殿は20メートル

ル位離れた所に別棟として建っている。佐渡にある能舞台や、九州各地に残っている能舞台もそのような形式である。国宝の西本願寺の舞台、宮島の能舞台も基本的に同じだ。

このような舞台で、ぼそぼそと謡っていても何も聞こえない。現代の能楽堂の環境とは違う。まして、ホールの敷舞台でマイクセットを使用しての能楽とは似て非なる物ではないか。ひところブームだった薪能は、その雰囲気を残しているかもしれないが…。私は能楽の本来は野外の音楽劇と考える。その意味で古代ギリシャ劇や中国の崑劇などの野外劇に近いのではないか。

オペラや京劇の鑑賞に詞章や訳文は必要ない。おおまかなあらすじと見どころ、役者の紹介等があれば十分ではないか。能楽オタクや能楽師シンパになりたいなら別であるが、普通に能楽を音楽劇として楽しむためには、若干の約束事やエピソードについての知識があれば、あとは四拍子や謡の旋律にたゆたって欲しい。そこに、何者かが出てきて、何かを訴えてくる。そのように能を楽しめないものか？

[The monologue of a band-player of Noh]

[Iitomi, Akihiro・飯富章宏（本名:飯富章博）能楽師・重要無形文化財総合指定・大倉流小鼓方・福岡市能楽協議会会長]